

スズロとソゾロ（その四）

我我妻 夕多智貝子

中古の文学作品には、スズロという形容動詞がよく用いられている。さらに、このスズロが音韻交替したソゾロも時に使われている。そこで、この両語はそれぞれどんな意味を有していたのか、また、その相違はどこにあるのかを探ってみることにし、まず、スズロの方から調べ始めた。ところが、このスズロの意味・用法はなかなか複雑で、すでにこの小誌で過去三回にわたり、調査結果を述べることになってしまった。すなわち、一回目は中古の代表的な『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』の三作品、二回目は他の中古の作品、そして前号の三回目には、中世・近世の作品を対象としてスズロの意味・用法について考察したことを述べて来た。

本号では、ひとまずスズロは措き、新たにソゾロについて調査した結果のあらましを記すことにする。以下、形式的には、これまでの続きの形をとり、述べて行くことにしたい。

三 ソソロ

ソソロもスズロと同じく平安時代に入ってから用いられた語で、上代には用例がない。ところで、ソソロについてはスズロと比較考察をしながら述べて行きたいので、まず初めに重複することにはなるが、前号までに述べたスズロの意味・用法を記しておくことにする。

- A (目的や理由がなく、心の赴くままに行動する様子を言い) あてもなくふらふらと、漫然と
- B (予期に反していやな事態が生じたときの不満な様子を言い) 不本意である、とんでもなくひどい
- C (しつくりしないで、面白味に欠ける様子について言い) 風情がない、つまらない
- D (理由なく、自然に進んで行く状態、気持ちを言い) 何となく、わけもなく
- E (出任せで、筋が通らない様子を言い) いい加減な、でたらめな、他愛もない
- F (あるべき程度を越えているさまを言い) むやみに、やたらに
- G (心を引かれることもなく、かかわりのないさまを言い) 無関心な、無関係な
- H (予期しなかったことが出現して驚いたさまを言い) 思いがけず、意外に

I・・・(思慮のない様子、考えの浅いさまを言い)

軽率である、はしたない、恥ずかしい

右に記したスズロの九つの意味・用法がはたしてソゾロでも使われているかどうか、これまで同様、時代別に見て行くことにしたい。

☆中古

この期におけるソゾロはスズロに比べてきわめて用例が少ない。例えば、主な作品で言うと、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『落窪物語』『枕草子』『更級日記』『大鏡』『古本説話集』『今鏡』には、スズロがそこそこ使われていたのに、ソゾロは全く用いられていない。(注1)

調査した作品中、ソゾロの用例数が目立って多かったのは『源氏物語』であった。これは、作品そのものが大部なので、当然と言えるかもしれないが、注目すべきなのは、その用法がすべて酷似していることである。すなわち、『源氏物語』のソゾロは、八例中七例までが形容詞サムシ(寒)を、また一例は形容動詞サムゲナリ(寒気)を下に伴った形で使われている。そこで、これらは、むしろ熟語化したものとして、ソゾロサムシという形容詞、あるいはソゾロサムゲナリという形容動詞として考えるのが一般的である。そして意味的には、ソゾロサムシの場合は、自然現象を対象とすると、左に記すいくつかの例で明らかのように、「なんとなく肌寒い」の意を表す。

。内裏わたりの旅寝さまざまかかるべく、気色はめるあたりはそぞろ寒くやと思つたまへられしかば・・・▲帚木

。ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りてそぞろ寒きに、竹河謡ひてかよれる姿「寄リアイ群レヲナシテ動ク姿」なつ

かしき声々の、絵にも描きとどめ難からむこそ口惜しけれ。

▲初音▽

。霜のいどこちたく置ききて、松原も色まがひてよろづの事そぞろ寒くおもしろさもあはれさも立ち添ひたり。

△若菜下▽

次に、これを人事の面で用いると、そくそくした落ち着きのないさまを言い、「寒気がするほどぞつと感する」の意となる。

。『源氏ノ』入り綾「舞葉ガ終ワツテ舞人ガ退場スルトキ、再ビ綾ヲツケテ、オモシロク舞イ納メルコト」のほど

そぞろ寒く、この世の事とおぼえず。

△紅葉賀▽

。『故院ノ』ありし御面影さやかに見えたまへる、『源氏ハ』そぞろ寒きほどなり。

△須磨▽

続いて、形容動詞のソソロサムゲナリは左に記す一例である。

。若君はいと恐ろしう、いかならんとわなななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、らうた

くおぼえて・・・

△若紫▽

右は光源氏が初めて紫上の邸を訪れ一夜を過ごした折の描写で、一文は「若君『紫上ノコト』はたいへん恐ろしく、どうなるのだらうかと、しせんと震えて、非常に美しいお肌の様子も、わけもなくいかにも寒そうでいらつしやるのを『源氏ハ』いじらしくお感じになつて」と通釈出来る。よつて、ソソロサムゲナリは寒さと恐ろしさに震える紫上の「肌つき」について言い、「なんとなく寒そうな様子である」の意となる。

『源氏物語』のソソロサムシとソソロサムゲナリは、右のような意味を示しているが、この場合、ソソロだけを見る

と、理由のはつきりしないことが意思に關係なく進んで行く感じを言い、「わけもなく」の意を表している。そこでこれは、先述したスズロの九つの意味のうちでは、Dの「何となく」に最も近く、Fの「むやみに」も少し含まれていると考えられる。ところで、このソソロサムシという語形は、『源氏物語』以外の中古の作品でもよく使われているので、左に用例を列挙しておくことにしたい。初めに自然現象について言う「何となく肌寒い」意の例を掲げる。

。いとよくはらはれたる遣水の、心地ゆきたるけしきして、池の水波たちさわぎそぞろ寒きに・・・▲紫式部日記

。「松ノ蔭ノ紅葉ナドガ」いみじく盛りに、色々めでたく見ゆるに、笑ましうそぞろ寒し。▲栄花物語・一一

。萩吹く風の音もそぞろ寒く旅の雁のたよりなげなる声も耳にとどまり・・・▲栄花物語・一六

次に、人事面で「どことなくぞくぞくする感しである」の意を示す例としては、左のようなものが挙げられる。

。思ひみだるる心ちはいとそぞろさむきに、宮も御らむじて・・・▲和泉式部日記

。色々錦の中より立ち出でたる船の案間くに、そぞろ寒くおもしろし。▲栄花物語・七

。七月十日大饗あるべしなどある程、この宮「一品宮」には珍しかるべき事にもあらねど、猶そぞろ寒くめでたし。▲栄花物語・二六

。年ごろはこの御琴の音うけ給はりつるは、そぞろ寒くすまして侍りつるを・・・▲浜松中納言物語・三

。此ノ男、貴キ事限リナシ、身ノ毛イモコナ堅テソソロ寒キ様ニ思ユ。、▲今昔物語集・一六ノ三二

。これ「姫君ノ琴」はいとおもしろく美々しくそぞろ寒く上手めかしきこと・・・

△夜の薄覺・五▽

以上、今回調査した作品の中に使われていたソソロサムシの例を挙げてみたが、延べにして九例になり、意外に多かった。特に、『栄花物語』では、すべての例がソソロサムシの形で用いられていた。したがって、中古の代表的な作品『源氏物語』と『栄花物語』では、ソソロはすぐ下に必ず「寒シ」または「寒ゲナリ」を伴うという、きわめて限定された用法であったことになる。

それでは引き続き、中古における右以外のソソロの用法を見て行くことにしたい。以下、前述したスズロの意味・用法、AからIの順に両語を比較しながら述べることにする。

まずAは、目的や理由がなく心の赴くままに行動する様子を言うもので、「あてもなくふらふらと」の意を表していた。スズロの場合にもこの例は余り多くなかったが、ソソロでも動詞「走る」「山ニ入ル」を伴った左の二例だけがこれに該当すると思われる。

。『殊の外に見苦し』など笑ひ、ひこじろひつつ「引ッバリアイナガラ」そぞろ走るなめり。 △狭衣物語・一▽

。淨飯王ノ御子ニテ王位ヲ継グベカリシニ、ソソロニ物ニ狂ヒテ山ニ入テ仏ニ成リタリトソ云ナル。

△今昔物語集・一ノ一一▽

次に、ほとんど連体形で使われ「不本意である」の意を示すBは、これまた、Aと同じく、スズロの用例も少なかったが、ソソロの場合も左の一例が見つかっただけである。

。『よろづのことよりも、この君のかくそぞろなる精進しておはするよ』

△蜻蛉日記・中・天祿二年六月▽

右は若君の鳴滝参籠について使者が言う言葉で、「どんなことよりも、この若君がこんな不本意な精進をしておいでなのがお気の毒で」と解釈出来る。よって、ソゾロはスズロのBと同義にとれる。

続く「つまらない」の意を表すCは、もっぱら「事(こと)」「にかかる形をとり、非常に用法的に限定されていた。そこでスズロの場合もほとんど用例がなかったが、ソゾロでは左の一例がこれに当てはまる。

。 。 「さては、そぞろなることをおぼすにこそあらめ」

△宇津保物語・国譲・中▽

右は藤壺の機嫌が悪いのを東宮が悩んでいるところで、ソゾロナルコトで「取るに足りないこと」または「つまらないこと」の意を表す。用法的にもソゾロはすぐ下の「事(こと)」「にかかっている」ので、スズロのCと同じになる。

その次のDは、スズロの場合も九つの意味の中で最も使用量が多かったが、ソゾロも例外ではない。特に『とりかへばや物語』は八例中十六例までがこの意味にとれる。左にいくつかの例を掲げておくことにしたい。

。 かけにいっしかと思ひしも、およびがほにこそ。そぞろにうち笑み、心地よげなるや。

△紫式部日記▽

。 いかでこなたを勝たせてしがな」とそぞろに思ひなりぬ。

△堤中納言物語・貝あはせ▽

。 いかでかくて世にはあらじと、そぞろにおほめる心の、年月に添へてもまさり侍れど……

△とりかへばや物語・上▽

。 えつつみあへ給はず、涙のこぼるれば、そぞろにはしたなき心地して……

△とりかへばや物語・中▽

。 右の大臣の女君に、そぞろに見馴れしほどの事おぼし出でられて……

△とりかへばや物語・下▽

これらはいずれも連用形で使われ、「うち笑む」「思ふ」「おぼゆ」「はしたなし」など、どちらかというところ、動きの少ない心づ表現の動詞、または形容詞にかかっている。したがって、スズロのDと同じ用法と言える。最後の『とりかへばや物語』の例も「右大臣の女君に何とはなしに夫婦として親しんでいた頃のことか思い出されて」と訳せるので、ソソロはDの意味になる。

続くEは連体形用法で、出任せて筋が通らない様子を言い、「いい加減な」の意を表すものであった。これはスズロの場合には、ある程度使用例があったが、ソソロでは左に掲げる『浜松中納言物語』の二例のみだった。

。われそぞろなりし人と思ひすてて、人知れぬ思ひにくだけど・・・

△浜松中納言物語・五▽

。まことのけぢかき契りのかたに心よりはてて「あらぬそぞろなる人ぞ」など教へ立てられんこそ、いみじくくちを
しう心づかるべけれ。

△浜松中納言物語・五▽

右はいずれも中納言のことを「不誠実でいい加減な人」と評しているので、スズロのEと同じになる。
その次の、程度の甚しいことを言い「むやみに」の意を表すというFは、スズロの場合、Dについて用例数が多かった。ところが、ソソロでは、このグループに属するのは左の一例だけである。

。かたちありさまも、かくこそはあらめ」と聞くにそぞろに涙こぼれて・・・

△とりかへばや物語・上▽

スズロを「涙」に用いた場合、「流る」「落つ」などの動詞を伴えば、自然発生的で穏やかなので、Dの「なんとなく」の意にした。しかし、同じ動詞でも「あふる」「こぼる」などは、ただ流れるのではなく、量的な多さや、質的な強さが感じられるため、Fの「むやみに」の意を当てはめて区別した。よって、右の例は「こぼる」にかかっているの
で、Fの意になる。というわけで、明らかにFととれるソソロは中古ではきわめて少ない。ただし、初めに述べたソソ

ロサムシやソソロサムゲナリのソソロに多少なりとも「むやみに」の意が含まれていると考えるならば、Fもその使用量が非常に少ないということにはならないと思う。

次のGは「人」や「男」にかかり、「無關心な」とか「無關係な」の意を表すものであるが、私が調べた限り、中古のソソロには用例が見当たらなかった。スズロの場合もGの使用率は低かったため、ソソロで用例が皆無だったのは大いにあり得ることだと思う。

ついでHは、予期に反した事態が起こるといふ点ではBとよく似ていた。ただ、Bが「本意である」と不満な様子を述べるのに対し、Hは「思いがけず」といふ単なる驚きを表すものであった。そして、このHもスズロの例が少なかったが、ソソロの場合も左の一例があっただけである。

夫起キ上リテ見ルニ、実ニ盗人モナケレバ、「障紙ノソソロニ倒レ懸リタリケル也ケリ」ト思ヒ得テ・・・

△今昔物語集・二八ノ四二▽

最後にIは、思慮の浅い様子を言い「軽率である」とか「恥ずかしい」の意を表していた。スズロの場合には『宇津保物語』でよく用いられていたが、ソソロの例は、同じ『宇津保物語』と『とりかへばや物語』に見える。

。大将「あやしくそぞろにてまゐりけるかな」とおほせど・・・

△宇津保物語・内侍のかみ▽

。そのこととなくてさぶらひ給はんもそぞろなれば・・・

△とりかへばや物語・上▽

右のうち『宇津保』の例は大将の参内に対して軽率であると言ひ、『とりかへばや』の方は「これといった名目がなくして出仕なさるのも軽々しいので」と訳せるので、いずれもソソロはスズロのIと同義になる。

以上、AからIまでスズロの意味と比較しながら述べて来たが、中古のソソロで出て来なかったのは、Gの「無關心な」だけだった。要するに、スズロとソソロは、使用量に差があるとはいへ、中古では、その意味・用法が非常によく

似た使われ方であったと言える。

ところでソソロの場合、スズロにはなかった新しい意味・用法が認められる。これは形式的には左に記すような二つの使い方になる。

。北方はそそろにおぼさるれど、この君をかくだにあらせんやはとおほして、おはして見たまへば……

△宇津保物語・国譲・中▽

。とかう思ひつづくるも、心のうちもそそろなる心地すれば、いそぎたちて、やがて廣澤に参り給へれば……

△夜の寢覺・二▽

初めの『宇津保』の例は、袖君をこうしておいてよいものかと思われて三条においてになった北の方の気持ちについて言及したもので、連用形で使われたソソロは、気分になんぞ落ちて着かず浮き立っている様子を指している。次の『夜の寢覺』は、「あれこれ思い続けて、心中何か落ち着かない気持ちがあるので、『宰相中将ハ』急いで廣澤に参上なさいます」と訳すことが出来る。よって、ソソロは宰相中将のそわそわとした落ち着かない気持ちを言い、形式的には連体形で「心地」にかかっている。つまり、連用形か連体形かの違いはあるが、意味的には両方とも人の気持ちについて「そわそわとして落ち着きがない」の意を表している。これらはスズロには見られなかった意味なので、ここで新たにJとして、ソソロの方に付け加えることにしたい。なお、このJには、他に左の二例がある。

。御心しらひの世のつねならぬを、尻上はそそろなる心地し給へれど……

△浜松中納言物語・三▽

。所がらにや我もそそろに浮きたちぬばかりきこゆなり。

△夜の寢覺・二▽

以上、中古における形容動詞ソソロの意味・用法をスズロと比べながら見て来たが、時代が下るとこれがどのように

変わって行くのか、引き続き調べてみることにしたい。

☆ 中世

前代の中古ではスズロとソゾロの差がそれほど顕著に現れていなかったが、この時代に入ると、双方の使い方に徐々に変化が見えて来る。以下、順を追って見て行くことにする。(注2)

まず初めに、中世の作品の中で、スズロには用例があったのに、ソゾロは全く使われていなかったが、ソゾロは出て来るという作品には『平家物語』『無名草子』『関吟集』『御伽草子』『増鏡』『義経記』『天草本平家物語』が挙げられる。また、謡曲や狂言もスズロはないが、ソゾロは何例か用いられている。右の事実からすると、説話文学では圧倒的にスズロがよく使われ、軍記物語や歴史物語など、いわゆる物語系統の作品ではソゾロが優勢であったことがわかる。つまり、中古ではほとんど気にならなかったが、中世に入ると、スズロとソゾロにはジャンルによる使い分けが何かしらあったのではないかと推察される。

次に、スズロ・ソゾロの両方が用いられている作品を見ると、用例数はほぼ同じである場合が多い。中でかなり差のあるものは、例えば中古では、左記のようなものであった。

作品名	スズロ	ソゾロ
宇津保物語	一九	三
源氏物語	五〇	八
浜松中納言物語	二七	四

右の四作品が中古でスズロとソゾロの使用量に差のあるものだが、いずれもスズロの方がソゾロよりも四〜六倍多く使われている。ところで、中世に入ると、私の調査したところでは、大部分の作品がスズロ・ソゾロほとんど同数用いられ、しかもその用例数はどれも五例前後と少ない。二桁台使われていたものは左の二作品だけである。

作品名

スズロ

ソゾロ

撰集抄

一五

四一

太平記

一

二九

右の二つの作品は用例数が他に比べて多いばかりでなく、スズロとソゾロの使用量にもかなりの差があり、いずれもソゾロの方が多く用いられている。以下、一作ずつもう少し詳しく見て行くことにしたい。

まず『撰集抄』は、説話文学なのに、スズロよりもソゾロがより多く使われている。これは前に述べたように、他の説話文学が、揃ってスズロの用例数の方が上回っていたことから考えると、例外になる。そこで、『撰集抄』という作品に注目してみると、これは西行仮託の書で、作者は未詳という。最初に九卷一二話から成る広本が鎌倉時代中頃（一二世紀の初頭）に成り、その後、三卷五八話から成る略本が室町時代半ばに作られたらしい。したがって、中世を代表する仏教説話集になる。本文はほとんどが漢字平仮名書きで、和漢混交文体で記され、地の文・会話共に、成立当時盛んであった「候ふ」ではなく、「侍り」が使われている。よって、文体は擬古文を指向しているのではないかと思われるが、「いとけなく」「みめことから」などいくつの中世語も出て来て、新しい傾向も認められる。要するに、新旧両方の語法が混在している作品と言える。そこで、ソゾロが他の説話文学と違ってスズロの倍以上用いられている

のは、当時の新しい語法を反映しているためと思われる。また、ススロ・ソソロが共に二桁台と多く使われているのは、作者がよほどこれらの語を好んだからであろう。(注3)

ついで『太平記』であるが、これは軍記物語なので、先述したようにソソロの方が多く用いられているのは納得が行く。ただ、両語の使用量にあまりにも開きがあり過ぎ、ほとんどがソソロで占められている。そのわけは、多分この作品が語り物として普及し、当時の語法が如実に現れているからではないだろうか。また、用例数が多いのは、『撰集抄』と同じく、作者の好みと考えられる。(注4)

以上、中世作品の中で、ススロ・ソソロの両語が使われているものうち、特徴のある二作品について、なぜ用例数が二桁台もあり、かつソソロの方が多く使用されているかについて考察を加えて来た。

引き続き、ソソロの意味・用法が中世では前代に比べてどう変わったかを、ススロと比較しつつ見て行きたい。

先の中古の場合、ソソロの意味はススロとほとんど変わりなく、任意に分けたAとIのうち、ソソロでなかったものはわずかにGの「無關心な」だけであった。その代わりソソロには、新しく「そわそわとして落ち着きがない」というJの意味が加わっていた。では、中世になっても、AとJの二〇個の意味・用法はそのまま使われているのであろうか。以下、用例を挙げながら順次一つずつ述べることにする。

A・・・これは中古でもあまり多く使われていなかったが、中世における用例は、私が調べた限りなかった。ただ、顕著な動きを示す語を伴い、「あてもなくふらふら」との意を表すソソロという、現代でもよく使う言葉「そぞろ歩き」が想起される。この場合のソソロは、まさにAの意味である。ソソロアルキはソソロアリキとも言い、一八世紀初めに成った古辞書の『書言字考節用集』に載っている。

漫 行 ソソロアリキ

つまりAのソソロは、単独で使われた実例こそないけれど、熟語化した形で、使い続けられていたものと考えていいのではないだろうか。

B・・・ススロ、そして中古のソソロと同じように、この意味を表すものは数が少なく、左記のように、『太平記』

に二例用いられていただけである。

。これ程なるうち囲みの軍にそぞろなる先懸けして打ち死にしたりとも・・・

△六・赤坂合戦の事▽

。そぞろなる御勞りとて大業を合はせし医師は皆面目を失ひて・・・

△二五・官方怨靈六本杉に会する事▽

初めの例は、敵の大軍に真つ先に攻め入ることについて、次の例は、病氣だと思つていたのに妊娠とわかつた時の驚きについて、それぞれソゾロを用いている。いずれも「不本意な」の意を表し、用法的にも連体形で使われているのでこのグループに含めて考えられる。

C・・・「事(こと)にかかる形をとり、「面白くない」「つまらない」の意を表すこのソゾロは、中土同様わずかに一例のみ使われていた。

。されど、思ひ給はず女身なれば、さまもなだらかならば、そぞろなる事いひて、ほいならぬことも侍るべし。

△撰集抄・七ノ二五▽

この文は通釈すると「しかし私は、お思いにならないでしょうが、女の身ですので、見かけが並ならば、つまらないことを言つて「声ヲカケラレ」、不本意なこともあるでしょう」となる。よつて、ソゾロはCの例となる。

D・・・スズロや中古のソゾロと変わらず、一〇個の意味の中では、用例数が最も多い。初めに前代ほどではないが、ソゾロサムシという一種の慣用句的な言い方がまだこの時代も使われている。

。老いらくは忍びもあへず難波瀉あしみの風のそぞろさむきに

△基俊集・一七三▽

。さらでだに、秋の初風は、けにそぞろ寒きならひを、ことほりにや。

△増鏡・二三▽

。あきのあめ けしきばかりに うちしぐれ そぞろさむきは そでのゆふつゆ

△連歌・永原千句▽

その他、『温故知新書』『文明本節用集』『書言字考節用集』などの古辞書類もソソロサムシを立項しているので、中古以来、相当長期間にわたって、この語句は使い続けられていたことがわかる。そして、前に述べたように、この場合のソソロは「何となく」という口の意味にとれる。他に中世作品の中でこの意味群に含まれる例には、左のようなものがある。

。女の歌はかやうにとぞとおほえてそぞろに涙ぐましくこそ。

△無名草子▽

。放して物を言はさいなう、そぞろ愛^{いと}つしうて何とせうぞなう。

△閑吟集▽

。書きおく跡を見侍りしに、そぞろに涙落ちて侍りき。

△撰集抄・二ノ一▽

。道希の身まかりて、漢字の経ばかり残りけるを見侍りけるに、そぞろに悲しく覚えて、泣く泣く漢字の経を取りて
もろこしに渡し侍りけり。

△撰集抄・九ノ六▽

。上の空なる者なれども、見るよりそぞろにいとはしく思ひて、その家に置きける。

△御伽草子・文正さうし▽

。しめやかに見えさせおはしししも、そぞろにものかなしくおほえて・・・

△とはすがたり・五▽

。帥官の御使、そぞろに一人笑みして帰り参りぬ。

△太平記・一五・賀茂神主改補の事▽

。稍まばらに照す月、そぞろに物悲しくて、足をはかりに「足ノ限り」行く程に……

△義経記・五▽

。なつころも ひもくれかたは むしなきて そぞろにないの たちまたるらむ

△連歌・永正一〇年▽

右に挙げた諸例は、下に心情表現を表す動詞や形容詞を伴い、連用形で使われるという用法上の特徴が見られ、これまで述べて来た、Dの、スズロ・中古のソソロと同じになる。

E・・・中古では『浜町中納言物語』に二例あったのだが、中世では『太平記』に三例見える。スズロに比べて用例が少なく、しかも、一つの作品に集中して使われている点が特徴的である。

。そぞろなる覚の奴原四、五百人切り落としてぞ捨て候ひつらん。

△一〇・長崎次郎高重最期合戦の事▽

。その頃、ものにも覚えぬ田舎の者ども、茶の会・酒宴の砌にて、そぞろなる物語しけるにも……

△一九・光厳院殿重祚の御事▽

。將軍も宰相殿も、戦ふまでもおはしまさじを、そぞろなる長命議

△三〇・高倉殿京都退去の事▽

右はいずれも連体形で用いられ、批判的な態度がうかがわれる点、これまでのEの用法と変わらない。

F・・・中古ではきわめて例が少なかったが、中世に入ると、スズロと同じく、用例数がDに次いで多い。まず左にくつかの例を掲げることにする。

。かやうに帝釈は人をみちびかせ給ふ事、はかりなし。そぞろに長者が財をうしなはむとは、何しにおぼしめさん。

△宇治拾遺物語・六ノ三▽

△建礼門院右京大夫集▽

。おもひいでらるることありて、そぞろにのみだのこぼれそめて・・・

。すまひおもひやられて、そぞろに泪のしどろなるに侍る。

△撰集抄・三ノ一▽

。此事かきおける旧跡をみ侍りしに、そぞろに泪をながして侍りき。

△撰集抄・九ノ二▽

。かたくななる人のその道知らぬは、そぞろに神の如くに言へども、道知れる人は更に信も起こさず。

△徒然草・七三▽

。さてこそ十方に分かれて追ひける兵も「そぞろに長追ひなせそ」とて、皆京中へぞ引つ返しける。

△太平記・一五・正月二十七日合戦の事▽

これらの例は、どれも連用形用法なので、先に述べたDと似ている。しかし、Dの「何となく」で訳したのでは物足りず、それよりも程度のはなはだしい、F「むやみに」の意がびつたりする。

ところで、スズロや中古のソソロで使われていた「涙」を対象としたソソロが右の例の中にもある。そのうち『建礼門院右京大夫集』の例は、すでにスズロや中古のソソロで見えて来たように、「涙」が「こぼる」なので、ただの「流る」や「落つ」より程度の激しさが感じられ、Fになる。次に『撰集抄』の初めの例は、ソソロニが形容動詞「しどろなり」にかかっている。「しどろ」は「秩序なく乱れたさま」をいうので、このソソロはFが適当だが、ただこの例は先にスズロでも用いられていた。(注5) つまり『撰集抄』では、スズロとソソロの用法が酷似していたことになる。もう一つの『撰集抄』の例は、ソソロニが「流る」ではなく「流す」にかかっている。「流す」は他動詞なので、手を加えないのに、涙が自然に流れるという自動詞形「流る」に比べ、かなり積極的・意志的な感じで捉えられる。よって、

「涙」を「何となく流す」よりも「むやみに流す」の意味の方がふさわしく、ソソロはFにとりたい。なお、このような「涙を流す」「涙を落とす」という他動詞にかかる言い方はスズロでは一例もなかったことを注目すべき点として付け加えておく。

G・・・中古では用例が皆無だったが、中世ではそこそこ使われていて、特に軍記物語に多かった。

。あはれにいとほしきものに思はれて、そぞろなる人の手より物をおほく得てけり。

△宇治拾遺物語・一一ノ七▽

。謀反をすすめ奉らんとしたのはかり事に、そぞろなる古いかうべを白い布につつんでたてまつたりけるに・・・

△平家物語・二二・紺掬之沙汰▽

。「何とて頼朝がそぞろなる侍どもをば、おほくきりけるぞ。」

△曾我物語・二〇・五郎がきらるる事▽

右記の他にも何例かあったが、ソソロが、体言の中でも「人」またはそれに関するものにかかる点で、スズロの用法と共通している。

H・・・スズロに比べてソソロの用例は少ない。中古では『今昔物語集』に一例あったのだが、中世でもわずかに左の二例だけが使われていた。

。その夢みつるより六日といふ日の時はかりに、そぞろにすい此半歩み入りたりけるが・・・

△宇治拾遺物語・一〇ノ五▽

けいせん

。荊棘「トゲガ多く、枝ノハビコルイバラ」の上には白雪せうせつそぞろにすいつもり・・・

△撰集抄・七ノ一▽

右はいずれも、思わぬ事態が出現したときの驚きを表して、この意味群に含めて考えることが出来る。

I・・・中世ではこのソソロは一例も用いられていなかった。ススロの場合も大部分が『宇津保物語』の例という偏った使い方だったし、ソソロも中古では一例しかなかったので、中世の例が見当たらなかったのは当然のことかもしれない。

J・・・ススロでは用例がなく、中古になって初めて出て来たこのソソロは、中世では一例あった。

。明け暮れわづらひて、心もそぞろになりはてて、明けくれば五条、暮るれば橋へ出で・・・

△御伽草子・猿蓑氏草紙▽

。面目の気色やな。面目の気色やな。そぞろ浮き立つわが心。

△謡曲・橋弁慶▽

中古の場合、この例は名詞「心」や動詞「浮き立つ」と併用されていたが、右の二例もそれに合致するので、このグループに属するものと考えられる。

以上、中世における形容動詞ソソロの意味・用法について述べて来たが、続いてこれが近世の作品ではどのように変わって来るかを概観することにした。

☆近世

まずススロについて見て来た際、近世における用例は非常に少なかった。特にこの期の代表的な三人の文学者、井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門の作品には、私の調べた限りススロは一例も使われていなかった。ところが、ソソロの方は、三人ともしっかりと用いている。またススロは用例の半分以上が上田秋成の『雨月物語』にあったが、この作品にはソソロも使われている。その他比較的例が多かった瀧澤馬琴の『権説呂張月』にも、ススロだけでなくソソロも用いられている。これらのことから考えて、この時代に入ると、ススロよりもソソロを用いる方が量的に多く、より一

般化していたものと思われる。そして、この事実は一七世紀初めに成った『日葡辞書』を見ると、一層はつきりとする。同書には、スズロもソソロも項目が挙がっているが、それぞれ左のように表記されている。

Suzuro スズロ(漫) Sozoro(漫)に同じ。詩歌語。なんとという考えもなしになされること。

Sonoro ソソロ(漫) 考えめぐらすでもなく、何か目的があるでもなくすること。あるいは、気難に改つとすること。

右の説明では、「ソソロに同じ」と記されているスズロに詩歌語という注が付けられている。つまり、この頃スズロは、すでに日俗語としての意識が薄れて来ていたことがわかる。それでは、反対に一般化していたと思われるソソロの意味・用法は、実際にはどうだったであろうか。今回調査したところでは、先に分類したA〜Jの一〇個の意味・用法のうち、近世でも使われていたのはD・F・I・Jの四つだけであった。以下、例を挙げながら、順に見て行くことにしたい。最初にDであるが、この中にソソロサムゲナリの例があった。

。江上の破屋をいづる程、風の声、そぞろ寒け也。

△甲子吟行▽

これは古く『源氏物語』に使われていたもので、それ以後、ソソロサムシこそよく出て来たけれど、私の調べたところでは、ソソロサムゲナリはなかった。ただ、芭蕉がこの語を使っているところからすると、この種の言い方が、慣用的な語法として、依然残っていたと思われる。その他のDの例をいくつか挙げておく。

。骨を見て坐まにま泣くみうちかへり

△冬の日▽

。五百年來の儂、今日の前にかびて、そぞろに珍し。

△奥の細道▽

。サア破軍はくぐんがなおつた、しすましたとそぞろそぞろに笑ふていさみをなす心てい思ひやられたり。

△堀川波鼓▽

これらはいずれも、心情表現を示す動詞または形容詞を伴い、これまでの用法と同じになる。次に、Fには左のようなものがある。

。そぞろそぞろに酔てねぶるものあらば、罰盃ばつぐさの數に水をのませんと、たはぶれあひぬ。

△続猿蓑集・上▽

。まして愛いとに尋ねたまはねはと、そぞろそぞろに泪なみだを流す。

△好色二代男・一▽

。錦祥女はすがりつく母の袂たもとの諸涙もろなみだ。甘燗あまじゆも道理ことわりに至極いたしてそぞろそぞろ涙なみだにくれけるが、やや有つて甘燗あまじゆ席せきを打つて・

△国性兼合戦・三▽

。子元来こもと好古こうこの癖くせあり。ここをもて漫まに蛇足まじりの弁べんを添そふ。

△樽説言張月・後篇・卷之六▽

初めの例は下の「酔て」にかかっているので、「何となく」よりもいちだんと強い「むやみに」の方がびつたりする。次の二例はまた「涙」を対象としたものだが、一つは他動詞「流す」を伴い、もう一つの「涙にくれる」は、現代でもよく使う、ひっきりなしに涙が出る状態を言うので、両方ともやはり程度のはなはだしい「やたらに」の意がふさわしい。最後は、為朝の享年しやうねんに関して諸説あることを、著者の馬琴が、これまでの小説の流れから離れて記した箇所である。「蛇足」は字面の通り、「あつても益のない無用の長物のたとえ」の意で、本来こんな説明文は書くべきでないのに、自分の癖でわざわざ書き足した旨、謙遜して述べている。ソソロニはそうすべきでないのに、むやみに書き添えたというのであるから、Fに該当する。以上、Fのソソロについては、近世の三大文学者が揃って用いていたことになる。続いて、Iは参考にした文献の中で、左の一例のみがあった。

時員聞きて身を起こし「いなそれは不覺なり。今しばしここに懸はば、心持清やかにぞなりぬべき。」

△權説三張月・後篇・卷之六▽

右は、旅の途中で思わぬ病氣になった時員が、同伴者の美少年朝權（ともわか）と共に途方にくれている場面である。通りすがった痴者（くせもの）蜘蛛手の渦丸（うずまる）は、悪たくみを考え、自分の家に良薬があるので、来るようにと言葉巧みに誘う。困り果てていたところへ救いの神が現れたことを心から喜んだ朝權は、誘いに応じようとする。ところが、時員は相手が嘘をついていると見抜き、その手には乗るまいと、身を起こして右のような言葉を発する。朝權の行為に対して、「イヤそれは軽率だ」とたしなめているので、ソソロはIになる。なお、ソソロのルビが付いている漢字「不覺」は『書言字考節用集』などの古辞書では、ススロ・ソソロの両方で訓んでいる。最後にJは、中世の用例こそ少なかったが、近世では割合よく用いられている。

。弥生平過る程、そぞろにうき立つ心の花の、われを道引枝折しぎりとなりて・・・

△笈の小文▽

。盛じゃ花はなに坐ま浮法師ぬめり妻

△芭蕉・東日記・天和元年▽

。しらぬ火の筑紫路もしらではと械をまくらする人の、富士筑波の嶺々を心にしむるそぞろなるかな。

△雨月物語・三・仏法僧▽

右のうち、最初の例は動詞「浮き立つ」に、次の例は「心のうわついた道案坊主」の意の「浮法師」にかかっている。どちらも心の落ち着かない様子を言い、今までのJの用法と同じになる。最後の『雨月物語』の例は、諸國を巡遊する旅のおもしろさを述べたところで、ソソロは心が浮き立つようなそそわそわとした感じを表している。よって、これもJが最も当てはまる訳になる。

以上、近世のソソロは、中古や中世に比べて、量的にも少なく、意味・用法もそれほど多種に分かれていなかった。その理由としては、対象とした作品が少なかったこと、全体的にソソロはあまり頻度数の多い語彙ではないこと、そして、細分化されていたソソロの意味・用法が集約化されると同時に、他の語に取って代わられるものも出て来たことなどが考えられる。しかし、いずれにしろ、質・量両面で、近世におけるソソロがスズロを凌駕していたことは明らかである。

以上、ソソロの意味・用法についてスズロと比較しながら中古・中世・近世と時代別に見て来た。多分、ソソロは中古で使われた当時、主としてソソロサムシとかソソロサムゲナリという慣用語として用いられていたであろう。それが、スズロと意味的に似通い、音韻も相通していたので、次第に両者は混同し、やがてソソロがスズロの領域まで侵すようになったものと思われる。おおむね右のような経緯が考えられるが、ただ、今まで意味・用法を細かく分け過ぎ、しかも、時代別に詳述して来たため、全体の流れがつかみにくくなってしまっている。また、『平家物語』などではソソロという例がある。そして、形容詞化したスズロハシやソソロハシ、さらに歌・事・心などが直接下に付いて熟語化した言葉の存在も気にかかる。その上、異文の問題もある。いずれにしろ、今回はソソロだけで、かなり紙数を費やしてしまっただので、右の諸件に関してはすべて次号に回すことにし、大方のご叱正を期待してこの辺で筆をおくことにしたい。

注1 中古の文学作品で底本としたものはスズロの時と変わらないので、割愛する。『学習院大学上代文学研究』

第27号参照。

2 中世の作品もスズロと同じものを底本にした。『学習院大学上代文学研究』第28号参照。

3 『撰集抄』の特性」、安田孝子、『説話文学の研究』所収、和泉書院、一九九七年一月など参照。

4 「中世における「太平記読み」について」、加美 宏、『軍記と語り物』9、軍記物談話会、昭和四十七年三月など参照。

5 注2の64ページ参照。